

ワシントン情報、裏 Version

2004年9月13日

竹中 正治

「映画 “Resident Evil, Apocalypse” : 戦う女は美しい！」

【SF ホラー映画、「ゾンビもの」の傑作】

日本のヒットゲーム「バイオ・ハザード」（プレイステーション2）がハリウッドで映画されたのが2001年の“Resident Evil”である。日本では映画も「バイオ・ハザード」のタイトルで供給された。私はゲームも映画(DVD)も楽しんだ。今年9月にその続編として“Resident Evil, Apocalypse”が封切られた。これは「ゾンビ（死人）」をベースにしたSF ホラー映画であり、そう聞いただけで「私の見る映画じゃない」と思う方も多いかもしれない。私の女房もその一人である。しかしここで止めずに読んで頂きたい。私はちょっと違うことを語ろうとしているのだ。

ストーリーは比較的単純である。まず第1作：アンブレラ・コーポレーションというバイオ系大企業が、米国中西部の都会の秘密バイオ地下研究所で、バイオ兵器開発の極秘プロジェクトを行っている。ところがひょんなことから、開発されたT-ウイルスと呼ばれるウイルスが流出し、研究所でブレイクアウト（感染爆発）が起きる。これは人間をゾンビ化させてしまうウイルスで、ゾンビは手当たり次第に人間に噛付く。噛まれた人間は感染して数時間後にはゾンビになってしまう。企業（アンブレラ）は感染爆発を起こした研究所に特殊部隊を送り込む。部隊は現場でアリス（映画のヒロイン）を発見するが、アリスは最初記憶がない。研究所は感染封鎖のために数時間後には封じられることになっている。そうなったら脱出は不可能だ。襲い掛かるゾンビの群れやバイオ実験で生み出されたモンスターと戦いながら、生き残った特殊部隊とアリスが研究所を脱出する過程が第1作のストーリーである。

今回の第2作では、感染爆発は研究所の外、市街に広がる。地下研究所を脱出したアリスと相棒の男性はアンブレラの新たな特殊部隊に拘束される。その過程でアリスとこの男性は、アンブレラによってバイオ実験を施された「モルモット」であったことが明らかにされる。アンブレラは超人的な戦闘能力をもったバイオ兵士の開発をしていたのだ。その結果、アリスには超人的な戦闘能力があり、市中を埋め尽くすゾンビの群れと戦いながら、生き残った警察官らと街からの脱出を図る。更にバイオ兵器の開発者と街に取り残されたその娘（少女）も絡んで物語は展開する。第1作の最後にアンブレラに拘束された相棒の男性は、遺伝子的な変異を遂げ、バイオ・モンスター兵士となる。しかもアンブレラに操作され、アリスらにも襲い掛かる。その姿はシュワルツネガーがゾンビ化したような様である。

この映画で最大の Evil（悪）はアンブレラ・コーポレーションである。アンブレラは街を封鎖し、アンブレラの武装警備隊が脱出を求める住民を追い返す。しかもゾンビと人間の戦場と化した街に、実験開発されたバイオ・モンスター兵士を投入し、その戦闘能力を実験するという冷酷非道ぶりである。対して、敢然としてバトルを展開するヒロイン・アリスがこの映画の魅力の目玉だ。

アリス役のミロ・ジョボビッチはロシア生まれで、映画“Fifth Element”と“Joan of Arc”（ジャンヌ・ダルク役）で一躍有名になった。私も両方の映画を見て、この女優のエキゾチックな魅力に魅せられた。

【映画、アニメの「戦うヒロイン・ブーム」】

気がついている人は少なくないと思うのだが、ハリウッド映画の現代のトレンドのひとつは「戦うヒロイン」である。いや、ハリウッド映画だけではない。「風の谷のナウシカ」、
「もののけ姫」にも代表される通り、アニメと映画の世界的なトレンドとなっている。伝統的なヒロインは、男性に愛され、守られ、救われる役柄だった。最近の映画でも
“Troy”のように古典をベースにした映画では、やはりヘレーナに代表されるように、ヒロインは愛され、守られ、場合によっては男性らの奪い合いの対象となる存在だ。

「戦うヒロイン・ブーム」はいつから始まったのか？ 私は“Alien (1979年)”でシガニー・ウイパーが演じた「リプリー」が発端だと思う。1970年代にも「アマゾネス」という女性兵士部族をテーマにした映画があった。当時学生だった私は見た記憶があるが、この映画はまだ「戦うヒロイン」時代の幕開けとは呼べない。映画の製作視点があまりにも男性視聴者の欲情に媚びているからである。グラマーな美人を半裸で戦わせ、男性視聴者をそそろうとする媚びに満ちている（美人に媚びられれば、私も拒みはしないが…。）

1979年の映画“Alien”でのリプリー（シガニー・ウイパー）は、全く違ったヒロインだった。彼女は宇宙船の一等航海士、つまりキャプテンであり、宇宙船のクルーらと自分を守るために（最後はペットの猫さえ見捨てずに）エイリアンと決死の戦いを演じた。ご存知、宮崎駿の「風の谷のナウシカ」は1984年である。文明が荒廃した未来世界で、小さな国の王女ナウシカはポータブルな飛行機械を操り、風に乗り、自在に空を飛び回る。彼女も国の住民と「森と虫たち」を守るために決死の戦いを演じた。もちろんナウシカは人も「虫」もほとんど殺さない。好戦的な人間らの戦争を回避するために行動するのであるが、その敢然とした行動力は「戦い」と呼ぶにふさわしい。宮崎駿の初期の作品「太陽の王子ホルスの大冒険（1968年）」や「未来少年コナン（1978年）」では主人公は少年で、登場するヒロイン役の女性はまだ戦わない。ヒーローに愛され、守られ、救出される役柄である。もっとも「未来少年コナン」のヒロイン・ラナは、深い情愛と強い意志を持ったプリンセス的なキャラクターで、次の「ナウシカ」（1984年）の到来を予兆している。1997年の「もののけ姫」のヒロインは、更にワイルドで戦闘的であり、仲間のオオカミ（神）らを守るために、人間と戦う。

90年代の傑作漫画とアニメ映画である「攻殻機動隊、Ghost in the shell」のヒロインである「その子」も代表的な「戦うヒロイン」だ。作者士郎正宗は80年代の漫画「アップルシード」で、既に「戦うヒロイン」のモデルを完成させているので、この人もこのトレンドの先駆者だ。

私の好きなもう一つのSFホラー・バトル系映画であるプレデター・シリーズも「戦うヒロイン」のトレンドを示している。1987年“Predator”第1作ではシュワルツネッカーがヒーロー役で、ジャングルを舞台にプレデターと戦った。唯一の女性キャラクターは現場で発見され救助される現地女性だった。1990年の都会を舞台にした“Predator 2”でプレデターと死闘を演じた主人公は男性黒人刑事だった。ところが、今年封切られた“Predator vs Alien”の主人公は女性で、彼女は考古学チームを引き連れて南極の未知の超古代文明の遺跡を発掘し、そこでエイリアンとプレデターのバルトに巻き込まれる。ヒロインは戦いながら生き延びて、ラストシーンではプレデターと共闘してエイリアンのマザーを倒した。

今回の“Resident Evil, Apocalypse”のアリスを演じたミラ・ジョボビッチ自身もこうしたトレンドを辿っている。1997年映画“Fifth Element”では主人公役を演じるブルース・ウ

イルスに救出され守られる役柄であった。しかし 1999 年の映画 “Joan of Arc” で文字通り戦うヒロインであるジャンヌ・ダルク役を演じ、“Resident Evil” の第 1 作 (2001 年) で「戦うヒロイン」アリスを演じた。映画 Matrix シリーズに登場するトリニティーも、現代の「戦うヒロイン」の代表例である。

【「戦うヒロイン」の魅力】

映画やアニメで「戦うヒロイン」が人気を得て、ひとつのトレンドとなった理由はなんだろうか？ 常識的に考えると、現代社会での男女同権化トレンドの反映である。しかし「戦うヒロイン」のブームには旧来のフェミニズムの発想とは違うものを感じる。旧来のフェミニズムは男女同権化のための制度改革や女性保護を掲げる。それはそれで必要だし、道理もある。ところが「戦うヒロイン」はそうしたことはそっちのけで、自分の感性で勝手に戦い始めている。しかも伝統的な「戦うヒーロー」にはない魅力も感じる。彼女らに共通している魅力は、仲間を守ろうとする深い情愛と、そのためには我が身の危険も躊躇しない敢然さだ。

今年の映画 “Troy” でブラッド・ピットが演じた勇者アキレスは格好良くて、映画の中で天才的なバトルシーンも魅力的だが、それ以上のものはない¹。男性キャラは、情愛の深さや、決然としながらも同時にしっとりとした感性を演じるのが総じて下手で、勇ましさが単調になってしまいがちだ。女性 (ヒロイン) の方が男性よりも、深い情愛とそのために決然として戦う深みのあるキャラクターを演じるのに適しているようである。

【続出し始めた実社会の「戦うヒロイン」】

「戦うヒロイン」はアニメ、映画の世界に止まらない。元人気プロレスラーだったアニマル浜口は、自分娘をレスリングの「戦うヒロイン」に育て上げた。今年のアテネ・オリンピックでは、初めてオリンピック種目となった女子レスリングで日本女子選手が 4 階級でメダルを獲得、内 2 つは金メダルという快挙を遂げ、世界的にも話題となった。海外のメディアが柔道での日本人女子選手のメダルラッシュも加えて、“Japanese Girls Power” と見出しにして報じていた。日本で空手や柔道など武術系のコミュニティー・スクールなどをのぞくと、小中学生の女の子が多いのにちょっと驚く。「ハッ！ハッ！」とかけ声も勇ましく、武術の練習に励む少女達は、可憐さと勇ましさが渾然としていて、見入ってしまう。「セーラームーン」、「ナウシカ」、「もののけ姫」を見て育った現代日本の若い女性世代の中には、旧世代とは違った価値観を獲得しつつある女性が明らかに増え始めている。

これは大変なことになって来た。世の中は「戦うヒロイン達」に満ち始めている。我々男性は「戦う勇ましさ」を男性の特権的な価値としてもはや独占できなくなってしまった。昔、沢田研二が歌っていた。「ボギー、あんたの時代は良かった。男がピカピカのキザでいられた～♪ (カサブランカ・ダンディー)」 「ピカピカのキザ」でいられなくなり、そのうえ「勇ましさ」も独占できなくなった男は、どうしたら良いのだろうか？ セーラームーンに「おしおき」でもされるしかないのだろうか。

以上

¹ アキレスと戦うトロイの王子ヘクターは、アキレスほど強くない。彼は家族と国民の存亡を背に背負いながらも、結局アキレスに一騎打ちを挑まれ、戦い、倒される。しかし愛する人々への情愛と戦う宿命の狭間で苛まれるヘクターの方が人間的に魅力的である。映画トロイをあなたが見たのなら、アキレスとヘクターの一騎打ちのシーンで、あなたはヘクターが負けることを知りながら、それでもヘクターに勝って欲しいと感じずにはいられなかったはずだ。違いますか？